

MON03198020237

地球第四卷第一號(大正十四年七月)——第五卷第二號(大正十五年二月)別刷

朝鮮地名の考説

中
村
新
太
郎

録号	845
登番	
分類号	
分番	
圖書号	
圖番	

朝鮮地名の考説 (二)

中村新太郎

緒言

我が國の地理學界は最近まで隆昌で
は我が國に於ける地理學の旺盛時代で
つて來たし、地理學を専攻した人士も
つてゐ、當時或る府縣で測量出版され
其後かゝる地圖は出版されず、加之今
さへ容易でないと言ふ次第である。



なかつた。尤も明治十一年頃から十七年頃まで
地理局があつたし、外國の事情が國民によく判
た。我等は今でも其頃計算した日本の面積を使
には大字の境界が現はされて居たにも拘らず、
の地圖を手に入れることはさて置き見ることで

地理學が學問でない様に思はれた明治の後半を過ぎ大正に這入つても十年餘りは實世界からは遠
く離れた學問で小學や中學の教課としてしか人はこの面白く且つ實益のある學問を認めなかつた。

地理學上攻究すべき問題の多いのにも係らず地理學に關する業績は五萬分一、二萬分一等の陸地測

量部の地形圖及水路部の海圖以外には甚だ寥々たる有様である。歴史地理の方面では前に郷岡氏の日本地理志料があり後には吉田氏の日本地名辭書があつたが純地理學としては二三の地形に關する論文を擧げ得るに過ぎなく、地誌として李敏藤、小幡南先生の大日本地誌がある許りで、要領を得た日本内部の記事を見るべくツイの日本やチャイナの日本及メーソンの日本案内を繙くのが捷徑である状態である。

大正に入つてから地理學に興味を持たれる先覺者が著して現はれて來て、地理學中日本の地形に關しては近年立派な著書が發表され、公認されるもの多しと言はしいことである。地圖があり、地形學が一般民衆の學問となり、歴史地理の根柢たるべき地誌があるとなれば次に與らねばならぬ地理學上の一分料は地名考説である。我が國形學の俊髦辻村氏は最近（地理學評論第一卷第二號二二頁）日本に於ても地名の語源を考へて多くの地理的事實が明かにされるに相違なく、地名考説を有意義に利用することは快心な仕事であると述べられて居るのは空谷に登音を聴くの趣があつて同感に堪へない。

日本地名の考説としては史學的には古くから著述もあつたが、國學者の取扱つたものは大日本國號考と云つた風のもので郷名以上の大地名であつた。稀れには馬琴の様に江戸四近の割合に小さな地名を考證したのもあつたが、物數寄の圏外に出たものとは思へない。吉田氏の地名辭書に到つ



て地名の史的考證を大成したものと云へるが地理學的であるとは云へない。

明治の中葉からチェンバーレンやバチエラーがアイヌ語で日本の地名の幾らかを解釋せんと試みたことは我等の好奇心を唆つたのであつたが、眞摯な後繼者が現はれなかつた。一方には宮崎博士の如く日本地名の極少數を朝鮮語で解釋しやうと試みた人士もあつた。然し之を大成する域には達せなんだ様である。明治の末年に柳田國男氏は『歴史地理』誌に幾度か日本地名の考説を寄せられた。其一部は正に地理學的であつたが民俗學的の色の濃いものであつた。之は唯一の日本地名考説と謂つてよい著述であるが、成書でなくて其後に流布されないのを遺憾とする。

日本の文物は複雑であつて其の地名考説は新しい研究域であると共に之を大成するのは容易ならぬ事業である。然しいつまでも此儘にこの興味と價値とのある地理學上の一方面を未墾の荒蕪地として残して置くことは残念に堪へない。と云つて之に手を染め出しても捗々しくは進めないと思へる。日本地名考説の魁をなすべく内地よりも文物の簡樸である朝鮮を俎上にのぼすのは幾分か容易な仕事である氣もするので、茲に十五年前から少しづつ準備して置いた朝鮮地名の考説を述べやうとするのである。

日本内地の事柄に對しては我々は一つ一つに新しい刺激も感興も感じないのであるが新附の國土に對しては第一に其が自分達の傳統的な環境とかけ離れた所にあるといふ點で強い感じを享けるの

である。畢竟異境的であるといふことが、攻究の動機ともなり、興味を喚び起す源ともなるのである。又他方から考へると五萬分一地形圖でさへ、より速に完成された朝鮮に關し日本のよりも先きに其地名考説が説かれることは寧ろ自然の勢であるとも強辨される。英國でさへ地名に關した著述にはゲトリック語のスコットランドやウエリッシュの話されるウエールズやに關したものが多いのものゝ云つたと同じ事情から起ることゝ思はれる。兎も角後來日本地名の考説が地學者によつて研鑽される様になるのを望む心から講話者には親しみのある朝鮮の地名に就いて談つて見たいまでである。

一、概 説

旬

朝鮮の地名は屢々改稱された。古くは高句麗コウリョの地名は新羅になつてまるで改められた。高麗や李朝にも改廢が多く、併合間際まで村の名(里洞名)は變更されて居た。併合後土地調査に伴はれて郡名と面名との一部が改められて現在では時に變更されることはあつても略定まつたものになつた。併し現在に於て或る一集落に用ひらるゝ名稱は公稱の外に幾つかの異名がある處もあつて數箇の名稱を持つ所がある。嘗て通過したことのある平安北道昌城郡の南境に近い長城門と俗稱される小部落は今では陽徳洞に屬するが、大正元年頃には新德里とも新得站とも呼ばれた。そんな風で地形圖上に記されて居る集落名が實際には用ひられて居ない場合が少なくない。五萬分一地形圖には新し

き呼稱の地名を書いて右傍の假名下書かれた地名は俗稱となつて居る古い地名を書いたものがあ
る。昨年平安南道中和郡祥原の東方一里の小部落に『白楊洞』と五萬分一圖に書かれた處を通つた。白
楊洞は如何に見てもサスルコルとは讀めない。之はもと土瑟洞と呼び今でも一般にサスルコルとは
云ふが白楊洞に改名されたのであつた。又江原道春川の北一里半で出會つた例は古い五萬分一に
玉山浦とかいてあつて漢字と其傍訓がどうしても一致しないから、里人に先づ此の傍訓の如くに此
處を通稱するのを確めた上で次にそれに對する漢字を聞いて見た處、新稱の方の漢字は知つては居
るが通稱に對する漢字は知らなかつた。今の五萬分一圖ではこゝは馬山里とかいてある。此等の例
は忙しい調査旅行の間に偶然に氣付いたものに過ぎないので少し調べたならばかゝる不思議の例は
幾らもあることと思ふ。何れも地名變更の多かつたのを裏書きするものである。

公稱の里名や洞名が地方人に通用しないのが甚だ多いから其場所へゆくまでは公稱の洞里名では
通用しないことがある。婦女子の如きになると自家の門牌(表札)に書き表はしてある里名は全然知
らぬ者が多い、唯俗稱を覚えて居るのみで字は無論知らない。かういふ風であるから一地方の地圖
には公稱里洞名以外の小地名又は幾つかの里洞を併せた總名に俗稱を掲げる必要があるが、こんな
地圖は郷土誌研究者の手を待たなければ出來うべくもないことである。

一體地名を基として地形や生業を解釋するには成可く小さな集落とか小澤とかに附けた名を用ふ

ることが必要である。國だとか郡だとか云ふ名を採つては充分な効果がないもので、外國の地名考説の書物にしても各國の名の様なあまりに大きな地名をのみ取扱つたものは地理學的眞髓に觸れて居ない。朝鮮に就いて云へば行政區劃の里洞名でも其一部は無意味に漢字を結びつけたもので地理的事實を示さない、それ故もつと小さな地名が必要である。公稱里洞の下の小洞名は五萬分一地形圖には可成多いが猶不足して居る。山間の溪谷で人家が數戸ある様な場所は、地形圖上に人家も現はされて居ないと同時に洞名も書かれて居ない。こんな洞名にかなり面白いものが多い。又朝鮮には山の名は多くなくて、著しいものゝ外は無名のが多いが、小澤でも谷には必ず名が附いて居る。——日本でも澤には大抵名があることは同様である。——谷の名は甚だ地名考説に重要である。部落の名にしても最初は谷の名から起つたものが甚だ多いと思へる。地籍の方では小地名の洞名の下に何々員とか何々坪とかの最小地名を用ひたり、山地であるとか何々嶮とつけて小別する。而して小地名は變改されない、洞里名は變へられても小さな集落の名、殊に小澤の名は決して變へられることがなくて殆んど永久に言ひ傳へられる。尤も轉訛はあるので名はあつても其の意義が其土地の人から忘れられて了つたものが甚だ多い。面白い小地名の字も意義も土地の者からは聞くことが出来ないで、却つて我々の様な朝鮮語の素養に乏しい者の專擅な解釋に委かして居る有様である。

朝鮮の地名を集めた書籍の二三を擧げて見ると、朝鮮總督府で地方行政區域名稱一覽といふのを

地名でなくてもかなり大きな集落の名が一般の人達からは訓讀される例も少くない。例へば大田を朝鮮人は訓讀してハンバと云ひ、裡里をソムニーと云ふ類で馴れない鐵道の出札係にソムニーと云つて乗車券を容易に買へなかつた氣の毒な朝鮮人を見たことがあつた。之等の驛名は諺文で示してある驛名でも音讀してライジョン及イーリリとかいてあつて、結局は音訓の兩様の讀方が行はれてゐるのである。

かく音讀では通じないと云ふことは地名は先まづにあつて後おそから漢字が宛て箱められたのであるからである。實際日本にしても宛字の地名が多い、此事は地名に關して東洋共通で、地名考説を一層複雑困難にする原因となる。この意味で地名の上では漢字は象形文字ではなくて音韻文字であると云へる。地名に附けた漢字は萬葉假名であると思へばよいのである。日本の地名でもさうであるが地名考説に當つて文字に拘泥するのは禁物である。殊に地名では美しい、佳き意味の文字を假用することが普通である。種々の宛字を用ひてある一例を擧げて見ると咸鏡南北道には、アルカリ石英粗面岩(ロメンダイト)と云ふ特種の火山岩から出來た圓く突起した山が多いが、こんな山峯に圓峰(トゥルンボンク)と云ふ名が附けられて居る。地圖を見ると杜陵峯、頭雲峰等とかゝれた同様な頭の圓い山がある。これ等は宛字であつてたゞ字から見ると圓いと云ふ意義が一つも現はされてゐないが、宛字に左右されて元の圓いと云ふ意義を没却してはならない。

美しい佳き意味の字を地名に附けたがる。述べたが朝鮮の地名には我々から見てむさくるしい、又は滑稽なものも少からずある。陋巷里、蠅頭里、道化里、腐橋里、長尿里、多食洞などは随分馬鹿げて居る地名である。

地名の研究は甚だ煩雜な仕事であるが、然かも其の結果は往々牽強附會に陥つて屑唾の物になり易い。然し朝鮮の文物は日本のそれに比してより簡樸で、地名には能く地形又は地理上の位置を示したものが、人文の状態例へば其の土地の主な生業を現はしたものが少くない、茲に述べるのは通常地名考説で行つて居る様に行政、地形、民居、生業等を現はす語辭を地名中より選抜し來つて其の説明をし、無理な地名解釋を成可く避けたいつもりである。

朝鮮地名の史的研究は甚だ興味ある問題で、殊に日本地名との關係は研究に價あるものである。既に宮崎博士や金澤博士が言語學上よりした研究がある。——金澤博士のは日鮮古代地名の研究と題された——こゝで述べる主要な目的は地名の地理的説明を試みながら、地名によつて朝鮮の自然及人文地理一斑を窺はんとするのであつて間々古代地名のことも交へて見たいと思ふ。

朝鮮地名に關して現在必要な事項は地名考説の他に我等が朝鮮の地名を如何に讀むべきかの問題である。既に逕信の方面では日本讀みを用ひて居る。朝鮮の地方に在住する日本人はある地名は日本讀みにし、ある地名は朝鮮讀みにして居るが其の何れも不完全な讀み方であることが少くない。

地名の讀方は統治行政の上にも關係があることであるから一定したいものである。現に測量部で製圖出版しつゝある百萬分一萬國圖調製の作業が進んで朝鮮を出すときに如何に朝鮮の地名を歐字化するかは考量をしなければならぬ大切な事柄である。全然朝鮮讀みにすることは今の日本として行へぬことである。反對に全然日本化することも種々の點から好ましいものではない。現に光州、公州、黃州、廣州の如きは普通の日本讀みにすると全く同じに聞える。十數年前には轉任の辭令を電報で受けて同音なるが爲めに全く違つた處に赴任して了つた憲兵があつたと聞いた。又京城ケイギョウをキョウウゼウと話された内地の人があつた爲に私はすぐそれを鏡城と思つて頓珍漢の答をしたことがあつた。それで主義としては朝鮮發音に近い日本讀みを用ふることがよいと思ふ。この問題は別に考究した所を論述しやうと考へるから茲では只其の一端を序に述べたまでである。

以下各論として行政區劃（こゝに屬する地名）及施設に關する地名、地形に關する地名、民居に關する地名、生業に關する地名に大別して地名考說の一般を述べて見やう。(未完)

朝鮮地名の考説(二)

中村新太郎

二、行政区劃に關する地名

現今朝鮮は行政上十三道に區劃され、此の下に十二府、二百十八郡、二島がある。道は内地の府縣に相當し府郡島は各々市郡島に該る。郡又は島の下に總數二千五百四の面がある。面は行政の最下單位で内地の町村に該る。面の下に里又は洞があり(其多くは里である)内地の大字に相當する。府では内地人の住居することが多い部分は里や洞の代りに町、通りを用ふる。町里洞の數は大正十三年六月現在で二萬八千三百一ある。之等郡面里洞の數はもとほもつと多くて併合當時には十二府三百十七郡、四千三百九十二面、六萬三千八百四十五洞里あつたが大正三年三月郡の廢合を行ひ又其後土地調査と共に里洞名の整理を行った結果數が減じたのである。上記の里洞の下に小字に相當する里洞があり、此の内には特に里や洞を附けない地名が少くなく、其の一部は五萬分一地形圖に

標記されてあるが又標記されてないものも可成りある。之等の小地名が地名考説の上では甚だ面白いものなのである。

道 朝鮮はもと十道に分けたり、八道に分けたりした、鷄林八道は我等に耳なれた熟語であつた今では京畿道、忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尙北道、慶尙南道、黄海道、平安南道、平安北道、江原道、咸鏡南道、咸鏡北道の十三である。之を略して時に京畿、忠北、忠南、全北、全南、慶北、慶南、黄海、平南、平北、江原、咸南、咸北と書きもするし云ひもする。古來朝鮮では大きな地方別を通常用ひた。例へば咸鏡道を關北と云ひ、平安道を關西と呼び、黄海道を海西と稱へ、江原道を關東、忠清全羅慶尙道を併せて三南と呼び、全羅道を湖南と云ふ如きである。現に大田より分れて全羅南北道を縦貫する鐵道線を湖南線と呼んで居る。然し當今では咸鏡南北を北鮮、平安黄海を西鮮、全羅慶尙を南鮮と呼んで居るが之に京畿江原忠清を中鮮として加へれば人文地理上では朝鮮全土の良き地方別が出来る。

道にはもと行政官の首腦として觀察使があつたが併合以來長官と改められ今では復た内地と同じに道知事になつた。道廳の所在地は交通機關の設備が出来るに従つて變へられることもあつて現に一昨年暮に平北道廳が義州から新義州に移つた。

府、郡、島 昔は道の下に其重要さに従つて府、牧、都護府、郡、縣の違つた名目を持つた郡

があつたが明治廿八年に一反總てを郡に改めた。今では府郡島の三種になつた。府は京城、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、仁川、平壤、鎮南浦、新義州、元山、清津の十二で行政官として府尹が居る。

郡には郡守があり、鬱陵島及濟州島の二島には島司がある。

郡廳所在地を邑と稱へ、昔邑であつた處に邑のついた地名が残つてをつたり又は古邑といふ地名も少なくない。邑又は邑内と云ふ代りに郡(コウル)又は郡内コナと云ふこともある。府郡廳所在地即ち邑は多く在來の都市又は大集落地であるが併合後交通機關の發達につれて邑の位置を代へたものもある。京畿の廣州邑は山地の高い處にあつたが低い交通の便利な京安里に移され、黃海の平山郡邑が交通の衝に當る南川に遷されたりした。朝鮮では都邑や集落の移轉は内地程儼劫なものではなく朝鮮人は移動し易い人種であるのである。

府郡名を通覽すると城のつくものが二十箇所もある。就中京城、開城、鏡城は主要な都市である。郡邑には石牆又は土壁で圍まれたものが多い。寧ろ朝鮮の郡邑は纏々城であると云つてよい。其あるものでは京城の様に都邑四周の山稜に壁を造る、從て外廓は楕圓に近い。或る邑は平地に四角又は圓形に近い外形を持つ様に壁を繞らすので其四角なものは支那の集落に似て居り其の圓形に近いものは大邱の様に城壁を撤去すれば其處に美しい環狀道路リングロードを造ることが出来る。城壁は何れも堀を

続らさない。此の點も支那集落の土壁に同じい。

山城は三國時代からあつて今でも丘陵の上に殘齋を殘して居るものが多い。かう云ふ處には山城里といふ地名が殘つて居ることもある。土城があつて土城と名のついた處も少くない。開城郡中西面の土城は恐く高麗朝のものださうだ。こんな山城や土城は其の殘壘が畑の間などに殘つてゐて遊子をして祇徊去り難からしめる趣を呈する所がまゝなきにしもあらずである。

高句麗では城を忽(コル)と云つた様である。忽の今の音はホルである。又昔は伐(ボル又はブル)とも呼んだ。此外加羅、古羅、狗盧、溝漚、支、斯只等も城寨又は都邑を指した言葉だといふのである。忽が城であるといふ例は東國郡縣沿革表を見ると、高句麗や百濟の忽が一名城であるか又は新羅になつて忽が城に變へられた二十餘の郡縣名の實例を獲るが其二三を擧げると次の如くである。

高句麗	新羅	高麗	朝鮮(李朝)
賈召忽縣	邵城縣	仁川府	仁川府
賈忽郡	水城郡	水原府	水原府
沙伏忽	赤城縣	陽城郡	陽城郡
達伏忽	高城郡	高城郡	高城郡
伏忽郡(百濟)	寶城郡	寶城郡	寶城郡

なほ忽は谷のコルをも現はして居たことは後に述べやう。

郡名には又州を附けたものが多い、州縣に分けた名残りである。邑が附いた郡名は全北の井邑のみである。舊時の邑を示した古邑、舊邑、邑内里、邑城里等の地名があり又破邑、罷邑等の小集落もある。

郡名を日本讀みにする時は區別のつかぬものがある。廣州京州南光州忠州南光州忠州南黃州黃州や、丹陽北潭陽南や、高陽京光陽全南や、高原咸洪原咸南や、金泉北金川海濱や、昌城北鍾城咸北や、清州忠星州北の如きであるが朝鮮音ならばある程度まで區別があるのである。

行政區劃で云ふ島には主要な島嶼の外に屬島があるから地理學的には本島のみであるか行政區劃の屬島を加へたものかを、區別せねばならない、これは内地の島制のある島でも同じことである。

舊時の行政區劃である牧がついた地名は少ない。牧溪などがある。縣の方は縣内里、縣里等の地名が時々ある、昔第二位の郡邑即ち縣の址を示したものである。

面 は内地の町村であるが内地の郷に當るもので方面を指したものである。其れ故邑を中心として東面、西面、東上面、東下面、東内面と云ふ様に方位を示したものが少くない。もとは面の代りに社又は坊を用ひた處もあつた。社は咸鏡道に多く坊は黃海道などに多かつた、又京城では内地の區に當る所に坊を用ひて居た。社は地名にもあつて社倉平南や雲社咸北などがある。昔郵曲と云つたのは面に似たもので收税などが正規のものでない特別の區域であつた様だ。

大正三年以前までは面の區域には甚だしく廣いものがあつて當時の咸南長津郡東上面の如きは南北約十五里に亙つて居つた。其後面の地域を改めて大小の差が少なくなつたがまだ中々大なる面もある。最大の面は咸北茂山郡三社面で百四十六方里一九九の面積があり、最小の面は忠北清州郡清州面で〇方里〇五三に過ぎない。而して面の平均面積は五方里五五一である。一般に北部に於て面が廣いのは人口の密度が小さい爲めである。

現今面のうちで内地人が多く住居し市街地を形成する面は指定面と稱され面長及選舉により選出された協議員より成る面協議會と稱する諮詢機關があつて起債能力を認められて居る。かゝる特別な指定面は四十一あつて此等は府以外の著しい都邑である。

里 支那に於ける意義は周禮によると五十家を以て一里とするのであるが、朝鮮では今は單に村落を表はして居、面に屬する土地區劃の名稱として洞と共に用ふるのである。里と洞との間には何等大小の關係はないが今ではどちらかと云ふと里の方が大きい區分に用ひられて居る。里を大字とし洞を小字とするのが多い。里はイー又はリーと讀んで訓のマルを使ふ場合は地名にはない様である。

洞 音はトングで訓はコルである、谷を云ひ又谷地の集落をも云ふ、小集落の單位である。一體朝鮮には大平野がない、主に丘陵地であり谷が多く谷に沿うて平地がある。かく谷から起つた洞を

稍大なる平地に散在する小集落にも附けるに到つた。洞は恰かも滿洲に於ける溝や峪に相當するものである。村内を洞内(トングネ)と云ひ、村の所有山を洞山(トングサン)と云ふ。

谷 一般に小地名に用ふる。然しこの下に里を附けて錦谷里、書谷里、大谷里などとして里名ともする。洞と谷とは同じ意味に用ひ、音は洞はトング、谷はコクであるが訓の方は共にコル、コリ(平北で用ふる)又はシルである。それで何々洞と書いてあつてもトングと呼ばずに何々コルといふ場合が多い。南鮮ではコルと云はずに谷をシルと讀ませるが谷とも書くし窒ともかく。蓋しコルの方言である。

一般に朝鮮の民居は廣き平地以外では山谷中に散布され、民居なき谷は甚だ稀で、よもやと思ふ狭き谷、小さき谷、森で蔽はれた谷の中にも見出すのである。五萬分一地形圖には小谷の中の四五戸まで群居したり又は獨立の家屋がぬけてをる。殊に開折された高原地へゆくど家居の存在を認めることが困難である。昨年旅行した江原道の南部寧越郡上東面などでは殆んど谷毎に數戸の人家(後に述べる定住した火田民家)があるのが五萬分一地形圖には書き現はされて居ないと同時に谷の地形の書き方はまるで出鱈目である。

朝鮮の谷には如何な小谷でも必ず名がある。随分笑はされる様なものもある。一例を擧げると張書房墓谷チャングワムソングヤムコルといふのは張さんの墓のある谷といふ意味である。小谷の名は普通地圖には掲げられて

ないが、前にも云つた様に地名考説上價値の大きなもので、昔から轉訛はいくらかあるにしても兎も角言ひ傳へ言ひ傳へして残つたものであるから、現に其地方の人達には其命名の理由が忘れられてはゐるが其獨自特有の名を保存して居るのであるとは明である。それで小谷の名で地物の特有なごや鑛物類の存在を推知することが出来る。小地名殊に小谷名の採訪蒐集は地理學上甚だ必要であると共に、古き歴史を明かにし、新しき統治を行ふ上にも參考となるものであると考へる。

谷の名の二三に就いて今述べた所を補つて試みる。普通の谷の名に通谷(トングゴル)と云ふのがある。之は此の谷を溯り峠を経て山の他側に通過し得る路のついでる谷である。峠を容易に越せる様な道路を持つた山の兩側の谷は同じ名で呼ばれる場合がかなりある。但し呼び方は同一でも文字だけは變へて混同の一部を避ける。例せば平北雲山郡克城洞の峠一つあちらは熙川郡極城洞である類である。又直洞(音讀はチクトング 訓讀はコツンゴル)は谷の屈曲して居ないまづ直線に近い走向を持つた谷である。高屯里(コツンリ)の如きは蓋し直を書き換へたに過ぎない。

私は嘗て江原道のある處で舊時の銀鑛産地を探らうとして農夫に其遺址を尋ねたが判らない、そこで此附近に銀店谷と呼ぶ谷はないかと聞いたところ、銀店谷はかしこだと教へて呉れた。蓋し銀店は銀冶である、銀を製鍊する工場のある處である。そして其教へられた谷を上つて行つて舊時の銀鑛採掘跡をつきとめたことがあつた。又ある年ゴツチエの朝鮮地質記事によつて平北厚昌郡子開

洞(子開は貝であらう、谷形貝に似たるより名付けたのであらう)に朝鮮玉の産地あるを讀んで之を檢せんとし子開洞に行つてその一軒屋で尋ねて見たが玉の産地を知らない。そこで試みに屋後の一小谷の名を聞いて試たところ、玉石谷と答へるではないか、しめたと思つてその小澤を上つて谷底に露はれて居る黄色の玉の産状を明かにして石灰岩から變質したものであることを確めた。又多くの砥石谷といふのに陶器の原料である陶石を産する。之は岩脈をなす半花崗岩で陶石又は砥石として用ひられるものである。こんな風地名を利用して幾多の忘れられた鑛床を發見した。これ等に就いてはなほ生業に關する地名を解釋する條下に述べるとして茲に應用地名考説の一端を云つて見た。谷は高句麗で忽、骨と書きたる香、堂、香忽とも云つた。二三の例を擧げて見ると高句麗では黄海道の今の平山を大谷とも多知忽とも云つた、又今の黄海道の瑞興を五谷とも于次吞忽とも云つた、高麗時代の咸鏡道の翼谷を於支吞と呼び、新羅高麗の江原道羽谿を羽谷とも玉堂とも言つた。

村 里洞に比敵するものに村がある。村の附いた地名は割合に少ない、朱村とか宋村とかの様なのは此處に住居して居る又は住居した主な者の姓氏を採つたのである。校村洞は郷校のある村で邑に極接近した處である。此のほか北村洞だとか五老村だとかがある。五老村は語路がよいので村とつけたのではなからうか、村の訓はマウルで之がマルに約され又方言として村のことをマシルと云ふ。

(未完)

여 백

朝鮮地名の考説(三)

中村新太郎

三 施設に関する地名

官や公共の施設に關した地名は多くない、其の著しいものを舉げて見る。

倉及昌 は同音でチャングである。昌は倉を書き代へたものであらう。倉には租穀貢米を貯藏するものもあり、荒備のものもあり、兵備のものもあつた。第一の意義の倉は現代のことで云へば政府の專賣事業である葉煙草を納れる倉庫に比敵するものである。朝鮮では一般のものが自己の所藏物を納める特別の倉を持つて居なかつた。特別の場合として都家と稱する共同倉庫を開城の商人達が所有して居るに過ぎなかつた。それで倉と云ふ字の附いた地名は悉く官設の倉庫があつた處である。東倉、南倉(南昌)、新倉(新昌)、内倉、別倉、假倉などの地名が多くあり又檜倉、岐倉、社倉等數ふるに暇がないが、倉を附けた地名は平北、平南、咸南に殊に多い、蓋し邊境に備へた軍倉も少か

らすあつたのである。其の位置も峠のすぐ近所にあつたり、河岸の稍著しい平地にあつたりする。全南海南郡には海倉、黄海載寧郡には海昌があり、慶北善山郡の洛東江畔には江倉がある。又單に倉里又は倉洞と現に呼ばれる集落が少なくない。若し朝鮮百五十萬分一圖を凝視すると點在する倉をつけた集落が眼底に映つて来る。今まで云ひ曉したが本稿の讀者が座右に朝鮮總督府編小林又七地圖店發賣の朝鮮百五十萬分一地圖(定價五十錢)を備へられんこと御奨めする。

昌は倉よりも地名に多く附けてないが、郡名として淳昌、居昌、厚昌、平昌、昌城、昌寧、昌原がある。咸南の金昌といふ處は昔砂金の産地であつた。

驛、站、院 は共に舊時の遞傳の制を残したものである。每四十里(一里は我が三町五十一間に當る)に驛を置いた、驛は公文を傳遞し公用の馬匹を供した所である。驛と驛との間には撥站(バルチヨム)を置き驛馬を交代する中繼場とした。大河に沿うては水站を設けた。驛に設けた館舍(宿舍)を驛院と云ふ。東國輿地勝覽には驛院の項があつて驛院名と邑からの里程が記されてある。

地名の下に驛をつけて呼んだものであるから現今の地名には驛の字が除かれて居るが間々驛里、驛村里、古驛里などの地名が残つて居て昔の驛路を忍ばしめるものがある。驛に屬した田畑があつて驛の費用に充てた、之を驛田とか驛土とか驛番とか云つた、又其の收穫を驛馬の飼養に充つる田畑を馬位番及馬位田と云つた。驛田里、馬田里等の地名がまゝある。驛馬を徵發する信となす馬牌があつた。馬牌は徑二寸五分内外の圓形の銅牌で一面には一匹乃至十匹の馬形を、他面には年月など

を刻したもので鑄刻された馬の數だけ徴發されるものであつた。李朝の末年には似せ馬牌が濫用されたといふことである。

院の附いた地名はかなり多く現存して居る。現に京釜線の鳥致院、京義線の沙里院は新勃興の貨物集散地として著しい處である。然し又寂漠たる山間に院の附いた地名も殘つて居る。嘗て平北寧邊郡曲波院を過つて其の餘りに寂しい所に院と稱へられる地名を訝かり、之を土人に質したところ旅宿があれば即ち院だと答へたものゝ、實は其處が舊時の驛傳の一に當つて居たものと思はれる。院に附屬した田畑を院田と稱へた、院田と云ふ地名もある。

撥站は擺撥(ババル)即ち飛脚の中繼場である、黃海平山郡には撥站里があり咸南豊山郡安山面老隱里のうち把撥といふ小集落が厚峙嶺の北の甲山街道にある。又把撥嶺と云ふ峠が平北渭原郡にある。京畿高陽郡には舊把撥里がある。把は擺に同じい。站は驛站でなくても平北熙川郡での様に里名の下の地名につけて小字を現はすことがある。

館は文事を掌る役所にもつけたが——弘文館だとか均成館の様に——地名に附した館は客館であるか又は官吏の駐在所かであつた。倭館は慶北の都邑であるが古くは日本からの使臣をとめた倭館は此處ばかりでなく數ヶ所にあつた。大館平北などがあり碧蹄館は内地人に取つては幼時におぼえる地名である。稀に客會里といふ地名もある。

亭 は亭園、亭榭で休み場である。道しるべのある所である。松亭里、石亭里、舟亭里、江亭等と云ふ様な地名が甚だ多いのは驛路を點綴した所謂五里の短亭、十里の長亭であつたのである。但し射亭と云ふのは武班の練武場で主に射を習つた所である。射亭里は所々にある。

堂 は祭祀を行ふ小堂である。舍堂里、元堂里、新堂里等の地名があり佛堂里又は佛堂洞と呼ばれる所が甚だ多いが今では大方はそこに佛寺がない、新羅や高麗の佛教の盛であつたときの遺物である。現代の民間信仰の堂に城隍堂(ソングホアングダング俗にソナングダングと云ふ)がある城隍神即ち土地の神を祭つた哀れな小さな祠堂で低い峠の傍や路傍の樹のある處などにある。それで小さな峠にソナングダングと云ふ名のあるのが少なくない。江原金化郡の堂峴(タンヨケエ)では嘗て獨逸人が砂金を採収した。堂峴は城隍堂のある峠と云ふ意味である。

校 邑には必ず郷校と文廟即ち孔子廟とがあつた。郷校洞、校洞里、校村里等の地名が郡邑の附近にある。邑を離れた地方の學校は寺小屋式のものであつて之を書堂(ソダング)と云ふ。書院と云ふのは學者を祀つて置いた處で南鮮には書院里なる地名がまゝある。

郡衙里、官廳里、官里等は役所の所在を示した里名であつて邑内にある。

宮 李朝以前の宮殿又は都のあつた處に宮のついた里名の残つて居るものがある。京畿廣州郡春官里の宮村は百濟國都の址だとされ、猶は同郡には宮内里、宮坪里がある。平南大同郡斧山面南宮

里は高麗朝大華宮の址だといふ。京城には近頃まで宮内洞、五宮洞、儲慶宮洞、宮基洞、統祥宮洞、宮洞等の洞名があつたが皆新しい名に代つて了つた。

鎮、堡、屯

は共に武備を施した箇所である。咸北の六鎮(茂山鎮古くは富寧)、會寧、鍾城、稷城、慶源

慶興)の様に鎮堡は邊境に多かつた。鎮堡のついた地名はかなり多い、惠山鎮は現在鴨綠江上游の伐木の中心であり中江鎮は鴨綠江中流の主要部落である。雲山郡の北鎮は米人の經營する金礦所在地として名高い。釜山鎮は釜山に連續した移輸出の貨物の陸上積込地である。堡をつけて呼ばれる所も鴨綠江近くには少くない、普天堡、仁慈堡、羅暖堡は惠山鎮の上流と下流とに點在して居る。伐(ボル)と云ふのも堡に似たものであらう、鴨綠江畔には高句麗の首都國內城のあつた處だと云はれる滿洲輯安縣の通溝に對して伐登鎮と云ふ小堡の址がある。京畿金浦郡には屯伐里といふ小地名がある。尤も新羅時代には伐は都邑を意味した、國都慶州を徐耶伐と呼んだのは其の一例である。屯又は屯地と云ふのは小武備地で山間の谷の分岐點などに位する。屯田兵を置いて屯に屬した屯田を耕さしめた處である。慶北奉化郡には遠屯といふ地名があり、京畿廣州郡には屯田里といふのがある。又何々屯地と云ふ小地名を諸處に見受ける。江華島では鎮の下にある小堡を墩としたが地名には見當らない。

營 は主に水軍の根據地である。慶南の統營は李舜臣以來三道(慶尙全羅忠清)水軍統制使の駐在

地であつた、統營は今では塗物と水産物と金鑽石の産地として著しい海港である。全南海南郡には右水營、康津郡には兵營がある。營は水軍について許りでなく陸内の鎮堡についても云つたので軍營里と云ふ地名は京畿漣川郡等にある、平北宣川郡には古軍營洞がある。

烽燧 は邊警を都に傳報する爲に山巔に設置したもので平時は一炬、賊の現出には二炬、近境には三炬、犯境には四炬、接戦には五炬を揚ぐるものとし、夜間は舉火し晝は煙を起した。起煙するには濡れた藁を燃して水蒸氣を起した。嘗て英人ベルチャーが濟州島を測量した時に鮮人の外人來れりと擧げた起煙を習つて測量の合圖に用ひた。烽燧は俗にボンケウジュと云ひ煙を擧げる所を烽臺又は煙臺と云ふ。烽臺は見通しのきく山巔に置かれたので、後に小三角點が置かれた處が少くない。輿地勝覽には烽燧の項があつて一々の烽燧に其の位置と之に應ずる南や北の烽燧が列擧されてある。又大東輿地圖や金正浩の輿地圖には朱で蠟燭の焰の様な形を畫いて烽臺の位置を示して居る。位置が山上にある爲め地名として残つて居るのは多くない。滿洲の煙臺もそれであるが我が朝鮮には小谷の名として煙臺谷平北朔州があり、京畿加平郡には烽燧里があり、京畿金浦郡梧柳洞に烽火村があり、江華郡には煙里がある。

陵、陵を附けた地名は往々ある。郡島名としては江陵、蔚陵島がある、これは岡の意義があつて大きな墓を表はしたものではない。開城附近には高麗王のや王族の陵墓が多いが地名としても韶陵

里、嘉陵里等がある、京城の四近にも貞陵里、思陵里、佳陵里等があるがこれは李朝の陵墓に屬する。この外南鮮にもまゝある、陵洞と云ふのは各處にある、其の一部は舊代の王陵がある所である。墓のことについては地形に關する地名中山の條下で述べるとする。

墳 塚である。京畿富川郡には馬墳里、同じく振威郡には海倉里のうちに長墳里がある。これ等は恐らく王陵の様な大きな陵墓のある處である。馬墳といつても馬の塚ではなく主墳を意味すると今西博士は述べられて居る。(未完)

여 백

朝鮮地名の考説 (四)

中村新太郎

四 地形に關する地名

地形を表はした朝鮮の言葉は日本のそれよりも寧ろ多い様であり、従つて地名によつて地形を判断すべき場所が甚だ多い。殊に朝鮮は一般に氣候劇烈であつて、特種の地形をして充分に其の特徴を發揮してゐることは朝鮮の地形圖を一見した者の直に氣付く所である。朝鮮の地形語を究めたならば日本の地名を解釋する上にも參考すべき事柄が多いと考へられるから一層朝鮮地名語の研究は我等に興味あり且つ有益であると信ずる。茲では充分にそれ等日鮮地名語の相關を論ずるに到るまでに研鑽の歩を進めて居ない、唯朝鮮の關した概説を試むるに止めるが、後來如上の論議をなすの基礎を作ることが出来れば望外の幸である。

島 島には海中の島と河中の島とがある、朝鮮の南方から南西方にかけての海には島嶼が多く、

昔から朝鮮王は一萬の島の王だと云はれたが、其の數三千三百五島あつて内周圍五百米以上のものが千九百三十島ある。最大の島は濟州島で面積約百二十方里、人口二十萬餘に達する。濟州島と嶺島には島制が布かれて居る。島には中々人口の稠密したものがある。南海島、江華島等の如きはそれで前者は一方里三千二百四十八人、後者は二千六百八十五人の密度を持つて居る。島の名にはかなりむづかしいのがある。島名の終りの島を音讀してトーと云ふことが多いが又之を訓讀してンムと呼ぶことも少くない。濟州島の屬島牛島をシェーンソムと云ふ。河の中の洲である京城の南東の蘇島はトクソムと云ひ内地人は訛つてトクソンと呼ぶ。漢江の中の汝矣島は今では飛行機の不時着陸場である。又時には平地に孤立した小丘に島をつけることもある。

山 音は日本音と同じくサンで訓はメである、時にミにもなる。朝鮮では山と墓とは切つても切れぬ關係がある。墓は一般に山に設ける。墓をモイと讀みメに近い。山と云へば墓の意味にもなるのは墓所を山所サシと云ひ、墓番を山直サジキと稱へ(山直里と云ふも地名も)墓地に關する訴訟を山訴と呼ぶのを見ても明かである。

山に陵墓を造るには所謂地理說即ち地術に據るのである。地術は新羅の末期に支那から這入つて來たもので、障風向陽の名地に祖先父母を埋葬する時は其の蔭澤子孫に及んで一門の榮華を來たすものとするのである。墓の最も良き位置は次の如き處である。即ち主脈が北から來て來龍(又は首

龍)で左右に岐れる。東を青龍と呼び西を白虎と稱へる、此の青龍と白虎との間に挟まれた南面の地を選ぶのである。墓の位置の南は低下して此處に東に下つてゆく谷があり、此の谷を隔て、南に案山と稱へられる小丘があるのを良しとする。以上は地相として最良のものなのでありとされる。かかる位置は獨り墓ばかりではなく實は都邑もかゝる位置を選ぶので京城の位置も略之に適つて居るのである。地術を行ふもの即ち地師(又は地觀)は山地を跋渉して地術の上で良いと思ふ場所を求めて歩き之を人に推奨するのである。かういふ俗習が古くからある爲め朝鮮在來の地圖、就中金正浩の輿地圖にしても古山子の大東輿地圖にしても山脈は明瞭に且つ細密に描寫されて居て、然かも細かい支脈に至るまでかなりの正確さを持つて居るのである。又朝鮮では一般に山を尊び殊に北部では山祭を行ふ。此の場合には内地の氏神祭に比敵するものゝ様である。

地名として山を用ひたものは甚だ多い。府郡の名としても群山、釜山、馬山、牙山のように其の數二十五もある。里名としては玉山洞、竹山洞、東山里、三山里、牛山里等殆んど擧ぐるに遑まがない。山岳を表はした場合には山は峰の集合したもの、言ひ換へれば一塊の山地を指すのである。金剛山、狼林山等皆然りであつて、其の一つ一つの頂點は峰と名ける。

次に山名及峯名のいくつかを擧げて見る。世界中何處でもある高い山に白山の名がある様に朝鮮にも白い山とつけたものが幾つかある。朝鮮の最高峰は白頭山(二七四四米)であり咸南の北水白山

(二五二二米)、平北、咸南の境の小白山(二一八四米)共に二千米以上に達し、江原慶北の間に蟠る太白山はどつしりした山地である。此の外朝鮮地誌資料の第二八表山岳の名稱所在及眞高の表を通覽すると八十五内外の白の字の付いた山名峯名を見出す。就中白山、白雲山、白岩山等の名が多い。

遮日峯と云ふのが平北寧遠郡と咸南定平郡との境(海抜一七四二米)や咸北北青郡(海抜一六六三米)や咸南豊山新興郡界(海抜二五〇六米)にある。普通に遮日と云ふのは幕や薄縁りで日光を遮る日除けである、遮陽石はルイフィンシュレト家根石のことである。

圓峯トユンボクのことは前に概説の條下で述べた様に頭雲峰、杜陵峰ともかゝれてゐる咸南高臺上に多い圓き峯である。平北江界郡の頭龍峰も恐く圓き峰であらう。頭流山(トルサン)、斗流峯、斗里峯、頭理峯がある、トリは勃海の語で外を意味すると云ふ、又金澤博士に従ふとトリは山の古語の達(タル)から轉じたものとも云ふ。南鮮の靈山智異山(チリサン)もトリから變じたものとの説もある。周峰(チュルボンク)も之に近いものである。

天摩山(チョルマサン)は京畿楊州郡と平北朔州義州兩郡の界とにある。後者は其の附近から時に甚だ品位のよい金鑛の發見されることで聞えて居る。チョルマと同じ訓みの山には天馬山(一)全南、(二)江原旌善、天馬峰(慶北、青松)、青馬山(黃海、遂安)、鐵馬山(一)慶南清道密陽界、(二)慶南、(三)慶南居昌山清界及び鐵馬嶺(江原、淮陽)がある。天摩と云へば天を摩すると云ふ意味とも思へるが、實はある民間信仰から鐵馬を山上に置いた山だと

考へられる。

國師峯（ククサボンク）と云ふ山が多い、殊に南鮮に多いが之と訓みを同じくし又は僅かの違ひのものには國祀峰、國士峰、國守峰、國主峰、國壽峰、國秀峰、國祠堂山があり又國師峴、國司嶺、國水峴——一般にククスコケー又はコクスコケーと聞える峠が甚だ多い。國師とは王が高僧に賜與する號であるさうであるが、峠などに高僧を尊んで堂を作つた佛教隆盛時代の遺物だと解釋される。然し國師峰だけにしても地誌資料の山岳表から見出したものが十六の多きに達するから或は他の意味があるのかも知れぬ。

國望峰（ククマンクボンク）又は國望山を四つ程見付けた。日本の上代の國求（くにまぎ）を想ひ出させる。日本でも展望のきく山の上から四方を望んでよき國をさがしたのであらう。國求（くにまぎ）は國を望むことである。

江原の金剛山や平北の妙高山や忠北の俗離山の様に寺のある山の峰名には佛教に因んだ名を取つてあることが多い。例を擧げて見ると毘盧峰（ビルボンク）は妙香山、金剛山、俗離山、五臺山にあつて俗離山のを除けば皆そこで最高峰である。金剛山には地藏峰、千佛山、勢至峰、文殊峰、世尊峰、彌勒峰等があり妙香山には香爐峰があり、俗離山には觀音峰があり、智異山には般若峰がある。

山の頂の外形を以て名づけたもの、中で最も普遍なのは甌峯（シルボンク）である。甌峯山、甌山、飯岩山、小甌峯などもある。之は山頂にいくらか平に見える部分があつて鉢を伏せた様な形をした山である。京都の愛宕山の頂を洛内から見た形と同じ形である。鉢山（バルサン）もあるし、之を發峯（バルボンク）などと書きかへたのもある。形から取つて枕峰（ビュゲボンク）と名づけられたのは白頭山の南方にある。鷹峰（メーボンク）や鷹峰（ソリボンク）などもかなりあるが、小鳥を狩りする爲めの鷹を捕へる樹木をたわめた係蹄（わか）が置かれてある山などにこんな名のついたのがある。

達 山は古語で達（タル）と云ふ、達は山であり又高いと云ふ形容詞でもある。高句麗の烏斯含達は新羅に兎山郡となり、夫斯達（フサル）は松山縣となつた。今でも木達里、達田里、達山里、朴達里、古達里等があり、郡名としては大田に接して達城郡がある。達山の如きはたゞ山を重ねたに過ぎない、朴達（バクタル）の朴は樺類の堅い木であるが、峠の名として朴達をかきかへて百殘峴としたのがあり、之が白岳ともなる。前に述べた様に頭流、智異などはタルから起り、又百濟（ハクセ）のタラも之で、山から轉じて國を意味することになり、國を朝鮮語でナラと云ふのも之から變つたと金澤博士は説かれた、果して然りとせば我が奈良は國を意味し、或は山にかこまれた國を意味するのも知れぬ。無論達をつけた山名は多い、朴達山、雲達山、高達山等がある。

龍 山は龍に象るから山に關係して龍の字を地名に用ふることが甚だ多い。猶ほ龍の字は鳳、虎、

鶴などと共に威勢のいゝ字であるから其の音を宛字に用ふることもあるのは言ふまでもない、郡名として龍を用ひてゐるのは龍岡(南)龍川(北)の二郡に過ぎないが里洞名には甚だ多く其の數數千にも及ばう。試に普通のものゝを擧げると、龍山、龍院、龍岩、龍潭、龍井等である。山井里も墓のある所の意味であると思ふが龍岡郡海雲面龍井里には高句麗時代の墳墓がある。

岳 時に支那風に山を岳と云ふことがある。即ち雅名として用ひた場合に云ふので例へば京城の三角山を白岳と呼ぶ様なのである、但し郡名としては安岳(海)がある。又濟州島だけでは孤立した山を岳(オルム)と云ふ。朝鮮本土の峯に當ることも見られる。

旨 の音にも訓にも今ではないがマルと讀ます地名が少くない。濟州島で旨マムとは平地から孤立して居る山だと聞いた。旨のついた地名は南鮮に多い。松旨里、栗旨里、赤旨里、禿旨里等がある。尤も音でよむ時は今の音のチと讀む。マルと呼ぶに至つた理由は未だ究めて居ない。

岡、邱、阜 のついた地名が少しくある。龍岡、大邱、平邱、古阜等が其れであるが共に邱陵を表はしたものである。

嶺(トワン) は前に概説の條に一寸述べた様に山地の小字に用ふるが、一體之は山嶺の頂を指す言葉である。低き山脊を山嶺(サントワン)と云ふ。里名としてはかなり多い、細嶺里、永嶺里、八嶺里等があるが又長登里などの登も嶺を略して書いたもので長い山稜を表はしたものと思ふ。

嶺、峙、峴、頂 は皆峙を表はす。朝鮮には平原少なく山勝ちであるから峙が甚だ多い。高い峙を嶺と云ひ、それよりも低いのを峙又は峴と云ふが朝鮮ではかなり高い峙にも峙をつけたのがあり。最も低いのを頂とする。

嶺(ヨング又はリヨング)は峙であつて山を指すのではない、咸北咸南には千五百米以上の峙が多い、咸南銅店嶺の如きは一八五七米に達する。車踰嶺は咸南、咸北、平北などに多い嶺名である。車踰嶺必ずしも車が通れるといふのではなくて車が通れさうな峙であると云ふに過ぎない、然し併合以來道路開鑿の結果自働車でさへ通れて、初めて名詮自稱になつた車踰嶺もある。之は地形から昔判断して付けた人が先見の明ある者になつたのである。自作嶺(チャチャクリヨング)と云ふのは自然に低くて峙を作して居るのを表はす。

峙(チ)と書いてあつても之を峴と同じくコケエと讀ますこともある。峴は訓コケエ音ヒョンである。訓の時に古介と書いたのもある。又峴は上に形容した言葉がある場合にコケエと云はずにたヶケエとも云ふ。例へば葛峴里は音ではカルヒョンニーであるが訓讀してカルゲーと云ふが如きである。峙の名に植物名を冠したものが少なくない、栗峴(バムコケエ)、蘆峴、蘆嶺、柳木峴、柎峙、などである。泥峴は泥や粘土のある峙であるが京城の泥峴(チンコケエ)は内地人の集まつた本町通りの一部である。沙峴(モレーコケエ)と云ふのは多く花崗岩の霽亂した砂が露はれて居て爲に道

がよい。岨は又京城などでは町の辻の意味にも用ひられてゐる。夜珠岨は小さな飲食店の並んだ鍾路通りどの辻から這入つた小路である。

項は頸である。モク、メク、メギなどゝ讀む。獐項(ノルモク)といふのが多い。之は主に河の劇しく屈曲して居る場合に河に沿うて道が曲がつて行かずに屈曲部の根元の處の低い頸を越して付いてる所である。白頭山の南方の虚項嶺(フハンニシ)は屢不注意に誤まれて虚項嶺などゝ書かれるが頂のない峠があらう筈はない、こゝは實際項がないので南方からこの玄武岩臺に登つてゆく道が通じて居る所が普通の峠の様に鞍部を作らずに左右にある山稜と其の通路との高低の差が著しくないのから起つた名である、平北昌城郡の緩項嶺なども頸即ち峠としての山稜からの低まりが著しくないのからつけられたのであらう。

串、端、末、角 何れも岬を表はす、串(コツ)は内地の串(クシ)に同じい。紀伊の串本は岬の根の處を意味し、内地には此の他、山口縣佐波郡に串と云ふ所があり、對馬上縣郡には櫛があり、福岡縣八女郡には串毛があり、串崎は福岡、山口、長崎の各縣にある。猶ほクシと云ふ言葉については後條の仇非の所で述べる。

朝鮮の串のうちで一番著しいのは黃海道西端黃海に突き出た長山串(チャンサッコ)である。之を日本の船夫は訛つてチャンチャンゴシと云ふのは面白い。串には岬角の外に川隈即ち川の屈曲

の義がある。平北泰川には串江があり京畿抱川には捲灘里(コッタニ)がある。蓋し捲は串と同義であらう。

端は東海岸の北部に多い、舞水端は其の著しいものである。末の訓はクツであつて串のコツに近い、東海岸の南部に多い。角は稀にある。

川、江、河、水 大河は江で、朝鮮には鴨綠江、豆滿江、大同江、漢江、錦江、洛東江の六大江がある。川は小川で音チョンケ訓ネーである。普通語として大きな川を江(カンク)と云ひ、小川をケウルと云ふ。ネーは又介(ケー)となる。川と書いてあつてもネーと云はずにケーと讀むことがある。川の付いた府郡は仁川、春川を初め三十一の多きに達し、里名には甚だ多くて擧げるに違ない。文川里、道川里、魚川里などは其一例に過ぎない。音と訓とを併せて清平川(チョンケビョンケネー)などと呼ぶ。河のついた地名は割合に少ない、郡名としては今では河東がある許りである。

水は水を示すことは勿論であるが又川の義がある。郡名としては長水、麗水、三水、水原がある、水の訓はムルであり、勿とも書く、於勿里、餘勿里、甘勿里等が南鮮にある。水の義としては清水洞等がある。蓋し勿は高句麗時代の水に對する宛字である。

川の古語は買(マイ)(又は米)である。涪水や浪水(漢代には鴨綠江を指し後魏では大同江を指したといふ)のバイも買であらう、猶ほ密(ミル)推(ミル)蔑(ミヨル)も水の古き語で買に同じい、慶南密陽の密も水を意味す、朝鮮ではミルがムルになり日本ではミルがミヅに變つた。安藝國安佐郡三入ミは水の義であるかも知れぬ。(未完)

朝鮮地名の考説(五)

中村新太郎

四 地形に関する地名ノツミキ

遷崖別 遷は二つの峡谷の合した處である、或は川沿ひの崖路である、水出兩峽中、其兩崖迫水之路、東俗名之曰遷とあり、瓮遷江原、通川、兔遷慶北、開慶、花遷平北、熙川、清江の上流、銅遷平北、酒原、山羊遷平北、江界等がある。滿洲の岔に相當する。崖道には別(ビヨル又はベリ)別吾(ビヨルウ)或は崖(ベリ)をつける。咸南長津に山羊別ヤンバグあり、山陽は山野に獵することオヤシダクで山陽軍は獵夫のことである、山羊別は、獵夫の歩く崖路と云ふ意である。

普通には崖路のことを飛脫(ビタル)と云ふ。ビタルに圮橋、仄岸、崖、遲達、壁橋の漢字を宛てることがある。沙汰(サッタ)は山崩れの急斜地で小地名として沙汰谷サッタコルがある。士多里サタリと云ふのも沙汰谷から轉じたものであらう。

仇非（クビ）は川の屈曲した部分である。仇味、鳩飛、貴碑、口非などの字で現はすこともある。蓋し仇非は前に述べた串が仇智（クツチ）となり再び轉じたものであらう。石仇非、回龍仇非などがあり殊に鴨綠江の本流及支流が侵入屈曲をした處に多い。一般に朝鮮では東西行する谷に屈曲が劇しく南北走する溪谷は紆餘することが少ない。これは地球の自轉による水流の遲緩に因るのだと考へられる。もし鴨綠江の一部の五萬分一地形圖例へば新島場圖幅三號を見るときにはデーヅキスの地形學にある侵入屈曲の模型にかゝれた地形を見出す。屈曲した流路が直流する様に流路を換へるともとの流路は半環形の平地となる。この流路變轉の地形は朝鮮到る處の山地に認めることが出来るが、其の著しい一二を舉げて見ると平北厚昌の銅店のすぐ南には圓形の舊河床が平地として残つて此處に釜内カマナはいふ三四軒の集落があつて、まるで釜の内にある様な地形を表はしてゐる。太白山の山中に穿川と稱する奥陶紀石灰岩の天然橋があつて洛東江の上流は其の橋下を流下する、此處は屈曲した舊河床の流路が石灰洞の出來た爲めに切り去られ（*cut out*）たものである。前に舉げた回龍仇非と云ふのは山で圍まれた侵入屈曲を意味する。川が迂回した處に水回場ミヅマヅがある。仇非又は仇味と云ふのは獨り川の屈曲した處ばかりでなく海岸の出入した處をも指すのであらう。九味浦クサツ、加馬九味カマクサツ等がある。内地では丹後に久美濱があり、隱岐島後の北西端に久見がある。蓋し屈曲多き海岸線を持つた處を示したものであらう。

隅は曲なり、曲がり角である。訓はモルで各地に石隅トルモと云ふのが多い、道が山端の露岩に當つて曲がつて居りそこに小平地がある處である。此の外堂隅カシモルとか長隅カシモルとかがある。隅のつく處にはよく小市場があつたり宿屋があつたりする。淋しい溪谷に沿うて旅した場合にはよくこんな處で晝食を攝る。

兩江、合水 二つの川の出會つた處である。兩江は平北に多く合水カシモは咸鏡道に多い。此の外に兩水里京畿楊平の兩水里は兩頭水(ヤンテムル)と俗稱する、兩合里あり、面名としては三支江面黃海があり郡名としては三水がある。

於口、澗口 は小流が大河に合する地點である。そして其の小溪名洞名を冠して何谷於口、何澗口と呼ぶ。かゝる落合には小集落が出来ることが普通である。前條の兩江、合水と共に内地の落合、川合、川俣などに該る地名である。

三巨里サムコリ と云ふ地名が中部以南に多い。其の三四を舉げて見ると京畿の漣川、忠南の牙山、全北の茂朱、全南の順天及び羅州、慶南の統營、江原の新溪などにある。これも二つの谷が合一し路が三又した處にある集落を意味するのである。三街里、三岐里といふのも同じことを表はしたに過ぎない。巨里と云ふのは後條に述べる市場の巨里に關係を持つた語でコリがつく地名は三巨里の外に次の如きものがある。巨里慶南蔚山、富巨里全北金堤、赤巨里京畿謹川、馬巨里同、増巨里京畿水原、仙古里全北塊川などが其

れである。

浦 音ボ訓ケである。一般には浦口、船著場、港を意味するが港と云つても必ずしも海港に限らない河港でも浦と云ふ。特に海浦と云へば朝鮮の西海岸に多い海岸の干潟地のことを指すのである。著しい都邑としては木浦、鎮南浦、兼二浦、金浦がある。釜山にしても昔は日本人は釜山浦と云つた。麻浦は京城の南西に接した漢江の荷船が著く處で内地人はマホと呼んで居る、然し古い本などには三浦とも書いてあるし、現在でも京城の西大門から電車でそこへゆく朝鮮人は皆サムゲと云ふ。

潟湖に浦と附けるのも内地で北浦や霞ヶ浦とするのに同じい、朝鮮で最大の湖沼は咸南咸興郡と定平郡とに跨る廣浦と云ふ潟湖で周三里十七町面積〇方里 八六二ある。

處が山間に浦をつけた地名を見出すことが屢である、そこには船を通ずる様な川がないが小流はある。平北熙川や慶北奉化の山地に石浦里があり忠北忠州に遠浦里がある、これ等の浦は流水の傍と云ふ意義でもあらう。

灘 音ナン、訓オルで、支那に於ける如く海の沖合でなくて、河中の浅い處の意義で峡谷を成した處にある。慶北開慶の犬灘は洛東江の一支が峡谷を成した處で二疊紀植物化石の産地である。忠南燕岐には壺灘里があり、忠北永同には虎灘里があり、其の他灘のついた地名が少くない。

溪 潭 淵 澤 をつけた地名がかなりある。溪は谷を美しく書き直したものであるらしい、郡としては新溪高麗の新慰と狭溪を併せたものがあり、市の開かれる集落としては玉溪江原、安溪慶北、長溪全北等がある。洞里名として溪をつけたものは甚だ多く、試みに忠北永同郡の洞里名百三十一を通過すると内に雪溪里、林溪里、覺溪里、晚溪里、紫溪里、小溪里、金溪里、溪龍里の八つを見る、それ位一般に溪のついた地名が多い、蓋し朝鮮には平地が狭くて高くはないが一體に山地であるからである。

潭淵澤は次項の淵に似て居るが山地の川沿ひの處につけられて居る。速潭里、龍潭、葛潭、長淵平澤等がある。

淵 池 湖 塘 堤 沼 函ヌツツ 淵には河の深い部分の意義があると共に池の意味もあつて池、沼などと同じく訓はモである。龍淵里と云ふ處が甚だ多い、郡名としては長淵がある。

池、沼、塘共に訓はモである。池である。白頭山頂の天池は周圍二里三十二町の火口湖である。湖沼の名として沼をつけたものは少ないが龍沼洞と云ふのは方々に見受ける。塘は地名としてかなり多い龍塘里、高塘里、池塘里等がある。池のモは古くは漸と書いさうである。

湖沼に湖や堤をつけたものが少くない。朝鮮第二の湖水たる腰橋湖は組合區域の廣さ三千五百九十町々に及ぶ全北臨盆水利組合の貯水池になつて居る。又全北金堤の菱堤は周二十三町の池である。各地に水利組合が組織されるにつれて人工の掘鑿池や谷を堰き止めた堰寒湖が出来つゝある。堤は

高句麗時代にはト(吐又は土)と云つたらしい。

困 キツ 時に淵皮と書く。段丘の下のシク／＼した沮洳地である。咸南の北青には水困湖及び絃琴困湖と呼ぶ湖水があり、平北の渭原や碧潼や咸南の三水には困坪里があり、平北楚山には淵皮江と稱する川があり、咸北端川には困峙山と呼ぶ山がある。

津 音シン訓ナル又はナリである。港又は渡場である。河についても海についても孰れでもよい。清津、城津等は海港であり、恩津は錦江畔の郡名である。長津南咸は高原上の小さき川の岸にある。山の中のものは無論渡頭を意味する。渡船を津船ナルベと云ふ。内地で津のついた處は海港か又は大津の様に海に比敵すべき大きな湖水に沿うた處である。大阪市に併合された東成郡及び西成郡の成ナリ又は生津ナルと同じい。朝鮮で又津は大河の或る一區間を表はすこともある。

渡 渡頭であることは津の一つの義に同じい、禮成江には碧瀾渡があり、安城川の安城渡は日清役に名高かつた。

橋 渡しに關聯して橋がある。橋のついた地名はかなり多い、大橋忠南公州、辰橋辰南河東、雙橋全南務安等擧げると違まない程多い。細橋里は各地にある。平南中和郡石橋には石灰岩の小天然橋がある。尤も石橋トルナリと云へば一般には小溪を渡る爲めに置かれた石塊が散布されたものである。橋頭里と云ふのは橋畔の集落である。

梁 水橋也又水堰也とあり、また加羅語謂門爲梁ともある。郡梁里京畿利川、梁坪里同、梁項里忠南保寧等のは橋又は門の義として説明し得られる。然るに今西博士は慶北慶山の押梁の梁は昔郡邑を意味した驟又は濼から梁になつたものでトル、トク、トなどと訓むだのが後には今のリヤンになつたのだと説かれて居る。此等の外占梁里忠南牙山、梁文里京畿抱川等がある。

海 郡名としては金海、南海、及海南が南方海に近い方にある。海州、鎮海は主要都市である。朝鮮の南方の海は地理上確定した名がないが朝鮮人から云はせると南海である。里名としては海のない處に東海里、海谷里などがあるが借字に過ぎないと思ふ。

泉 井 朝鮮は一般に飲用水に乏しく朝鮮人は天然の泉の水を好む、泉洞と云ふ小地名は何處にもある、水の少ない地方で偶泉の湧く谷であるとして名づけたものである。金泉は慶北の殷盛な町であり、醴泉は慶北の静な郡邑である。冷泉洞、湧泉里、槐泉洞などはかなり多い地名である。椒泉里慶南蔚山は炭酸泉の出るからつけたものである。

井は井戸の意味とあるが主に泉の意である。冷井洞はざらにある。忠北清州の椒井里にはよき炭酸泉が湧き今ではサイダーや炭酸水を賣出してゐる。黄海安岳にも椒井と云ふ處がある。大井里なども屢々ある。温井と云ふと温泉のことである。朝鮮には新しき地質時代の火山は少ないが温泉は五十數箇所ある。

水は其意義が河とも水ともなると前に述べたが泉や井に比敵して冷水洞、清水洞、大水洞、薬水里等が多い、薬水は岩盤の罅隙から湧き出す水で多くは含鐵炭酸泉であつて其のあるものには遠方から飲みに来る者が蝟集する。夏期はさうした山あひのちよびちよびしか出ない泉の周圍が一大遊山場になることがある。

坪 平地を意味する。音ビヨン訓ツェル又はボルである。大きな平地許りでなく谷の中の小平地をも坪と云ふ。里名の下の小員にも坪を用ふる。一般に朝鮮には大平地がない、大概砂質の川沿ひの平地である。粘土質の平野は全北の平野の外にはまづない。田番原野何れにしても平地であれば坪である。内地の野又は平に該る。坪のついた地名は擧げることの出来ない程多い、倉坪、向坪、官坪官有地である、廣坪、草坪柴場であらう、葛坪、後坪、江坪、錦坪、梨坪、沙坪、松坪、柳坪等はよくある地名である。咸南三水には天坪トヨンボリがある、位置の高い坪で次項の徳に比ぶべきものである。

坪を略して平となつたものは郡名にもある、加平、楊平砥平と楊根とを合併したものを、咸平、定平がそれで坪と書いたのはない。里名でも坪と書かずに平にしたものもある。

野 原 野は坪と同じ意味であるが坪程多く用ひられない。野は眞の原野で開拓の充分及ばないものを云ふのであらう。翠野黄海州、瓦野里黄海州瑞興等があり、昔は沙里院附近の載寧江平地の一部を棘城野と呼んだ。

原は地名に用ひられることが多い、殊に郡名としては次の如きものがある。水原、鐵原、原州、南原、昌原、平原、利原、高原、洪原、渭原これである。野を意味するのであらう。

德 現今の朝鮮音では^{三六}であるが^{テキ}と云ふのである。時に^德とか^德とも書く。(東國名山記)凡山峻迤高而上平者、北人謂之德。(北塞記略)北人以平坂爲德、北路諸山多以德爲名者以此也又は高埠曰德とあり、蓋し德は女眞語である。咸南咸北の玄武岩の臺地を主とし、片麻岩や石灰岩の高原が溪谷の爲めに分離して上の平かなメーサ状の地形を呈したものが德である。滿洲の阜又は崗に略當る。加藤清正が銀鑛を掘つて製銀を太閤に献じたといふ咸南端川の檢德(又は檢義徳山)を初めとして^{イカラテキ}日本で云へば^{カラハヒ}樺皮德などがある、又徳嶺と續けて徳のある峠が少くない、即ち鷹徳嶺、柏徳嶺、長徳嶺、葛麻徳嶺等である。徳は平な處を意味するので坪を^{テキ}と呼ぶ様になつた處もある。咸南甲山の大田坪は^{クンバテキ}と云ふ。徳の地形のよく顯はれてをるのは五萬分一新福場^{甲山、二號}、登足里^{甲山、三號} 圖幅などである。徳は咸北咸南から平北の奥地まで^{テキ}と云ふが其より南では徳が著しく残つて居ない。

坡 音はバである、坂だである。松坡、南坡、葛坡など中々多い、京城府内の龍山には青坡がある、坂ではあるが又段丘の意味もある様である。

培臺台 は小丘、段丘又は山頂が臺上になつて居るのを指す、餘り多くないがまた里名や峯

の名に見出す。

石 巖(岩) 石及び巖をつけた地名は甚だ多い、朝鮮では森林を濫伐したのと氣候が劇烈である爲めとて岩石の露出が甚だ好い。

石の方は天然の霽岩又は砂礫などからつけたのでなくて築造物から來た石が少くない、白石里は珪石ケイストーンの出た處である、金鑛脈の殆んど總ては珪石から出來て居るが白いのには金が少ない。然し白石里の附近にはよき合金珪石脈を尋ねあてないものでもない。玄石里、廣石里、化石里などもある化石は古生物の意味ではない、美しい石位の意である。

立石里イダシと云ふのが多い。内地でも立石峠などがある様に古碑又は古い時代の築造物の殘骸がある處である。碑石洞もよくある、碑閣があることがある。また揅石ツイン又は支石と云ふのは高句麗時代の墓の封土が取り去られて中の玄室の四壁にした平たい大石が顯はれたものである。揅石のうちには石器時代に屬するものもあると説く人もある。支石洞とか揅石洞とか云ふ地名が各處に散在して居る、こんな地名はなくても人家から遠い畑中に支石が大きく残つて居るのを時に見ることもある。

巖又は岩は音アム訓パウイで之がついた地名は甚だしく多い。郡名としては靈巖があるのみであるが、鳳岩、龍巖龍岩浦の如く、徳岩、花岩、雲岩、仙岩、赤岩、白巖など、ついたのはざらにある。門岩といふのは珪岩か堅い岩脈かが出て谷を夾んで門の様に聳つたものである。休岩ヒダクには往來の人の腰を

おろす大石がある。平北雲山の龜岩チャラバウや大岩クシバウは金鑛である石英脈の露頭であつた。高句麗の巴衣は新羅で巖となり、又波兮及び波衣は峴ミヤとなつた様であるが我が四國で海岸から出た岩礁イハユを漕イユといふのも巖ミヤの變轉したものであらう。

沙 砂 沙又は砂をつけた地名もかなりある。京城仁川間の素砂などを除くと沙の方が多い。沙峴ミシヤと云ふのは大抵甚しく霉亂した花崗岩の出で居る低い峠で道がよくて越え易い。沙村サムンと云ふのは河縁りの沙地である。渡し場の船頭のことを沙軍と云ふ。然し慶北高靈郡の沙鳧洞は沙夫であつて陶工のことを云ふのだと云ふことである、此處には磁器窯の遺址がある。(未完)

여 백

朝鮮地名の考説 (六)

中村新太郎

附 位置を示す語

地形に關する地名の附りとして地名に附けられて位置を示す語を擧げて見る。

東西南北 の方位を附つたものはかなりある。安東、河東、江東は郡名であり、里名としては東幕里と云ふのが多い。南海や江西も郡名である。北をつけた郡里名も時に見受ける。江原道江陵郡の牛市場として名高い北坪はツェイツェルと呼ぶ。後坪の意である。即ち北を後とするのである。濟州島の北浦もツェイケエと呼ぶ。陽は南を意味するとはかりは云へぬ様であるが高陽、丹陽、南陽等の郡名や里名がある。陽地といふのは陽の當る側を云ひ地名にも少くない。尤も朝鮮の民家は南向を撰んで建てない、陽に無關係である。これは壁の厚い爲めであらう。

上中下 洞里名に上下をつけるのは普通である。上草里、下草里があり、皮上里、皮下里のあるが如きである。たゞ上洞、下洞と云ふのもある。從て中洞も出來て來る。

間 間洞（訓よみにしてシェーコル）又は間坪といふのが多い。谷に沿うた二つの集落の間にある小集落を表はす。間坪と云へば坪といつても極めて小さな平地のある處である。半程里又は半程里といふのが往々あるこれは二つの集落の丁度中程にある所といふ意義であらう。

前後 前坪、後坪などは甚だ多い、一般に村の背後にある山を後山アッサーンといひ前アッサーンにある山を前山と呼ぶ。

内外 内洞、外洞も甚だ多い。

底 城底里、樓底里、庫底、山底里、嶺底洞などの底は麓とか下とかいふ意である。一般に少し高い物の下は皆底（ミッテ）といふ。

遠 近いといふ方は多くないが遠の字のついた地名は少くない、遠洞、遠川（ムウンネー）などは多い里洞名である。

地 境（チギョン）は道や郡の界にある地名である。然し今では郡を廢合した結果現在の郡界に一致しなくなつたものも少くない。地境といふのは普通名詞で土地の區劃界を意味する言葉である。

五、民居に關する地名

堡 家基である、屋敷地即ち宅地である。隱堡洞、大堡洞、玉堡里、良堡里、場堡里、新堡洞等

堡をつけた地名が多い。宅地の意味から起つて集落を意味することとなつたものである。

基 音はキで訓はトである。址也、據也とあり、敷地である。村の敷地又は市場の敷地といふ意である。大基オホキ、新基ニヒキといふのが多い。其のほか市基、館基ウツキ、豊基トヨキ、弓基、長基などがある。基のつく所には市場が開かれる所が多い。基の第二の意義に漁場である。

巨里街 街路をコリといふ。金澤博士は歩ユクから來たものだとされる。要所にあたる集落である。三巨里のことは前に述べたが兩巨里京畿も四巨里慶南もある。程巨里、赤巨里、馬巨里などといふものもある。郡邑をコウルと云ふのに近い。

幕 は小屋である。山幕は山地を開墾する爲めに作つた山小屋即ち火田（日本の焼畑）をつくる爲めの小住家である。山幕里といふのは今では火田の少ない南鮮にもかなり多い地名である。新幕は京義線上の急に開けた小市である。板幕里は板を挽く小屋のある所である。

居酒屋を酒幕サカマと云ふ。酒幕巨里といふ所が僻地にあればその酒幕は宿屋を兼ねて居る。それで田舎では宿屋のことを酒幕と呼ぶ。地名としては新酒幕ニヒユマといふのがよくある。新に街道が出来た爲めに宿屋や酒屋が新に出来た所である。かうなると他に元からの地名があつてもそこを新酒幕と呼んで了つて元の洞名は公稱としては残つても一般にそれが通用しなくなる。其の一例は平壤から南東に向ふ祥原街道の大同郡小山底で出遇つた。然しこんな新酒幕はその街道の交通の盛衰や前

後の集落で起る僅か許りの事件に影響されて荷馬車も休まない従つて酒幕家もなくなつて了ふ様な根柢の弱い一時の街路集落に過ぎないのである。

單に幕洞とか幕洞里と云ふのは小屋のある澤を表はし、石幕は石小屋であつて地名としても甲山咸茂朱北等にある。鹽幕は製鹽場で紙幕里では紙を造つた。沙器幕里江原では陶器を作つて居る。之等の外幕のついた地名では東幕里が多く古幕は新幕に對して附けた名であらう。周幕里、龍幕洞などもある。

平北には山や峠の名に幕のついたのが少くない。板幕嶺、蓋幕山、開幕山、貂幕嶺、犂幕山等がそれである。この幕は前記の小屋の意味として説明し得るが又かうも解釋されさうである。平北では谷底の上流へ向つての傾斜が緩であつて分水嶺下で急に高まつて居る地形が多い。それで谷の下方から行く手の峠の方を仰ぐと張り布幕の様に棚引く分水嶺の連嶂を見る、之を私は幕の地形と云ひたい。實際幕のついた峠や山はかうした地形を有つて居る。

六、生業に關する地名

生業に關した地名は少くない。私よりもつと朝鮮語に通じ、生活の事情を知つて居る人にはここに述べる地名の數倍が生業に關したものであることを見出し得やうと思ふ。今までに氣付いた幾かのものを取扱つて見てあとは後來の研鑽に残すこととする。

イ、商業に關する地名

朝鮮では見世を開いて商賈を營むことは郡邑にのみ見る所で、地方一般の商賈は負商及襍商と稱する行商人によつて主に行はれる。又後に述べる市場が定期に各所で開かれてそこに集つて來る買手と賣手とで需給を滑かにするのである。

廬 は見世である。京城の舊洞名に砂器廬洞、米廬洞、鞋廬後洞があつた。安州平南には鹽廬里がある。現に平壤府に鹽店洞があるが之は舊洞名の鹽廬洞と店洞とを併せて出來た新名であつて鹽店が町中にあるわけがない、と云ふのは後述の如く店は見世ではない製造場のことであるからである。

壩 音チャングであり平安道の音ではタングである。これは市の立つ集落を指す、市の立つ集落を普通語で場チキョク巨里と云ふ。朝鮮には開市場が千三百七十五箇所許りあつて陰曆の一と七の日とか二と八の日とか五日毎に開かれる。公稱の里名としては場を除いてあるものが多いが一般には場をつけて呼ぶ、舊場、新場、漢場、水回場、金良場、笠場等擧ぐるに違まない。

市には特別のものがある。馬市とか牛市とかカそれで、特に大邱の藥令市と稱する市は今では十二月一日より翌年一月末日迄開かれ、主に漢藥の取引が行はれ近郷近在より蝟集し來るもの毎市一萬人を下らない。市は獨り地方の需給が通せられる許りでなく市を利用して或は訪問或は其の他の用事を足すに使はれ、飲食店が澤山に出て遂には一種の娛樂場たる觀を呈させる。私共がよく繪端

書で見える様な都會地に白衣の人達が密集して居て殷盛な光景を呈して居るのはかうした市日の時に撮影されたもので日常の有様ではないのである。尤も地方の街道に沿うた淋しい集落などの市日は哀れな有様を呈して居るのも無論ある。商品を入れた風呂敷包を脊に負うていそいで田舎道をゆく者に出遇ふことが常である、之は一つの市の立つ處から次の開市場へ、急ぐ旅商人である。

場には又牧場の意義もある、馬場は馬市ではなく馬の牧場である。諸所に馬場里といふのがある。昔江華島に鎮江場と呼ぶ牧場があつた。又沙場は砂原である。

市 場の代りに市とした市の立つ處も多くはないがまゝある。南市平北 楊市平北 雲市咸北 錦城等はその例である。

市邊は利子のことであるが金川海に市邊里といふのがある。

契 朝鮮には契と稱する組合組織又は部落内で規約を作ることが發達して居る。松契といへば松を植樹する組合であり、學契といへば學校組合である。小地名として京城にはもと新設契、甕里上契、青坡一契等があり、全州北には一契里、二契里があつた。町内でまとまつて申し合せをしたのから起つたのであらう。

都家 といふのは商人仲間の共同の倉庫で昔から朝鮮で一番商業の盛であつた開城には今でも都家が残つて居るさうである。京城の舊小地名に都家洞があり、其の他山の中の小地名に都家洞例へば平

北江界郡があるのは穀物の倉でもあつたのではなからうか。
從南面

ロ、農業に關する地名

耕作することを農事ノシゴトと云ふ、茂山北及龍仁東等に農事洞がある。然しこれは附近が農事に適さないのにそこだけ耕作し得られたから着けた地名で、必ずしも其の地方が農業の盛な土地であるといふ意味ではない。地名としては農所里といふのが朝鮮に數箇所ある。これは農事の稍盛なのを示したのではなからうか。所と云つても後で述べる製造場の義あるものではないと思ふ。

朝鮮は農業國である爲めに農業に關した地名は少くない。

田 音はチオン訓はパである。昔は田と云へば田畑を共に云つたが今では田は畑即ち乾田である。麥田里が諸所にあるのもこのことは了解される。水田の方は畚シと呼ぶ。日本では畠又は畑が文字をかへて來て朝鮮では畚の方が字が變つて來た。又朝鮮訓の田は日本では「田」となつた。

田と云へば穀物許りに限らない。松林は松田ムギノであり、收益の多い蘆の生へた川沿ひの濕地を蘆田と云ふ。松田里、蘆田里などは屢々出會ふ地名である。麥田里も多いが牟田里と云ふのも麥田を意味する。麻田は京畿の古い郡名にもあつたし地名としても多い。

楊州、徳川、抱川、金浦等にある。

楮田、竹田、漆田を

地名にしたのも多く麥田里は人蔘畑のある處であらう。主要郡邑には幹線鐵道線の分岐點にある爲め急に町らしくなつた大田がある。

田制殊に官田に就いては韓國時代には種々の制度があつた。種々の名を付けた官有地が多かつたのである。前に驛傳のことを述べた時に云つた馬位田又は驛位田は其の收穫を驛馬の飼養に究てる畑であり、地名としては馬田里、馬位里、驛田里がある。屯田、院田、陳田（免稅された土地）、公須田（諸官衙に屬した一定の土地）があつたが之等は皆地名に残つて例へば公須里、公須田里がある。庄土は所有地を意味する。地名にある將士、章土等は庄土を書きかへたものである特種の者の所有地だといふ意であらう。又大庄里と云ふのも之に類するものである。

畚 音タツ訓ノンである。訓の「*tsu*」は日本で「*tsu*」と變つた。水田である。地名として畚洞（タツトン）又はノンコル、畚谷洞が多い。畚洞と呼ぶ小地名がかなり多いが之は其の地方に水田が多いと云ふことを表はすものではない、水田の一般には出来ない地方に極めて小區域に畚のつくれる谷の一部が畚洞であるのである。珍らしいと云ふ方から附けたのである。地名の反語法である。朝鮮には多富洞、富貴洞、萬戸洞などを田舎の地名に見ることがあるが必ずしも富者の集落でもなければ都邑を形成する様な大集落でもなくて、却つて貧しいか淋しい小集落である。貧なるが故に、寂漠たるが故に富まんことを欲し殷盛ならんことを望んで命名したに過ぎない、唯永久に其の欲望が達せられず小集落として残つて居るのである。

防禦 狀 朝鮮には百五十三萬町歩以上の水田がある。従て古來堤防を築いて貯水池を作り以て

灌漑に便にした處が少くない。現今では幾つかの水利組合が出来て灌漑によつて水田を廣めつゝある。防築は堤防であり、堰と溝渠とを併せて沢と云ふのである。防築里は南鮮に多い地名でよく南鮮に米産の多いのを示して居る。沢のついた地名としては沢坪里京畿安城、忠北塔川、慶南海博等にあり、石沢全南和順等がある。水碓洞、水車洞、水裏洞、水裏洞 といふのは水車小屋のある溪谷の意味である。山溪中にある水車洞の水車は車ではなくて桶を二つ附けたボタンボタンと音をゆつたり立てながら米を搗く仕掛である。小地名としては可成り多い。

斗落 は田の面積の稱呼で内地の何斗落と同じで種粳何斗の苗を植付け得る面積の謂である。一斗落の廣狭は一定しないが平均百五十坪内外である。地名として南原全北に斗落里がある。

看坪 と云ふのは内地の檢毛即ち檢見である。即ち作物の登熟前後に地主又は其の代理人が立會つて立毛のまゝで收穫量を考査して其の年の小作料を定めることである。時に小地名に看坪といふのがあつた。いつも檢見する處の義である。

舍音 は土地の管理者である。朝鮮の大地主は都邑に住んで田舎には舍音が居て小作人に折衝する、報恩北忠に舍音里がある。

夜味 は土地の一筆である。沃溝全北に夜味鳥里があり、抱川及振威共に京畿に夜味里があり、楊平京畿には也味里があり、水原には大夜味里がある。大夜味里を除けば小さな土地を示したものであらう。

於書 は約束手形であるが、於音里、漁隠里、於隣里等が多いのは地主と小作との間にある約定が盛り立った事を示したものではなからうかと思ふ。(未完)

朝鮮地名の考説 (七、完)

中村新太郎

六、生業に關する地名ノツミキ

ハ、林業及草木に關する地名

林 林のついた地名は少くない林川扶餘はもと郡であつた。山林洞、石林洞、美林、岐林、巨林、松林、箕林等いくらでもある。但し林のついた所必ずしも伐木事業が行はれて居る處ではない、朝鮮には林野たるべき山地が甚だ廣く其の總面積は千五百八十八萬町歩あるにも拘らず濫伐と火田開墾の爲め荒廢して現在の成林地は五百四十八萬町に過ぎない。其の位置も江原道の脊梁山地や鳴綠豆滿南江の僻陬にあつて其の他の處では一般に薪にも困る位である、激雨の多い朝鮮は毎年水害の爲めに困しめられる、之を救ふべき手段は殖林を措いて外にない。立派な森林をもつた幾多の林のついた地名が新たに出来ることを祈らずには居られない。

板 平北などの林のある地方にゆくと板洞スルム、板子洞ノコソル、列於洞ノムヨム、板幕洞などがある、之等は板を産

する處である。

樹木の名のついた地名も多い。柳洞、柳木洞、柳田洞等の柳のついた處が少なくない。柳の木は朝鮮にはかなり多い。楊木洞もある。檜洞、又は會洞檜木洞又は峠の名として檜木峠ヘイモツナイなどが高い山の奥まつた處にある。檜洞と云ふと灰洞ヘイコウと間違ひ易い。山地を除くと一般の樹木は松である。片麻岩の霏亂した赤土とまがりくねつた松木ソノキとは朝鮮の著しい景觀を作るものである。製材にしても乾くと拗たがれる松は家の材料となり、松葉は一般の焚物にされる。京城の様な大都會でも松葉を堆うづたか積んだ牛をノソノソと牽きながら都大路を行く松葉賣を見ぬ日はない、松葉の煙は嬋々と温突の煙だしから朝に夕に棚引く。焚木のない朝鮮では松葉でも木キと云ふ。松の附いた地名は中々多い。松田洞、松林里、松峴里、松川洞など擧げきれない。試みに平北秦川郡の洞名を通覽すると、全郡で八十二洞中松のついた地名が松貴洞、松谷洞、新松洞、松隅洞、松栢洞、松峴洞、松川洞、松南洞松北洞の九つある、一割以上にも達してゐる。此等の外楓洞、樺洞、楸洞等がある。

草では柵洞サリコがある、柵は萩である。蓬田洞、葛田洞、葛谷里がある。芦洞や芦谷洞は甚だ多い、蘆田は河畔にあつて収益の多いものである。製紙のバルブの原料にも試用されて居る。草坪は柴草の叢生地である。古沙里コサリ例、金堤全北や古土里コサリ例、三珍江原と云ふのは蕨わらびのことであらう。現に上蕨里上蕨里例、金堤全北がある。

ニ、水産に關する地名

水産に關する地名は甚だ少ない、少くとも述者の知つて居るものは次の二三に過ぎない。

箭 は築である。江原杵城郡に長箭がある。捕鯨の一中心になつて居る。昔から長い築で漁魚した處であつたのであらう。平南龍岡郡に箭浦がある。大同江と載寧江との合流點に近い處で今では東津里と合併して東箭里となつた。咸南文川郡には箭灘がある。

方魚津 と云ふのが蔚山慶南と清河慶北とにある、共に漁場である。方魚は魴魚であつて内地の鱸まづである。迎日濟附近は内地の漁夫も移住して居て鯨の漁場である。

慶興咸北に黃魚浦がある。黃魚は鱧魚とも云ひ鱧まづのことである。鏡城咸北漁耶面には漁大津の小港があり、其の東方の海角を漁耶端と云ふ。之等は漁業に關係のある地名であるが、漁波平南は海に關係はなく農産地である。

鹽盆 は製鹽の大釜である。鏡城咸北の海岸には鹽盆と云ふ小地名がある。

ホ、工業に關する地名

店所 店チゴムは工場である。商ひの店ではない。又支那の様に宿屋のことでもない。商ひ見世は廬で、宿舍なれば院である。店は昔は所と云つた様である。沙器店、沙器所は陶器製造場のある處で瓮器店ウシギは土器を作るところである。沙器幕、瓮店などがある。笠店では笠を造り、鎗店は眞鎗細工

をする所である。紙所船所全海光陽威重三水がある。然し餅店黃海金川は餅を作る所ではなく、陶磁か金物を作つたところであらう。

瓦洞キワコム、瓦里ミなどと云ふのは瓦を作る處である。

冶アヒモツコム 冶谷アヒモツコムや冶洞は所々にある、鍛冶屋の谷である。尤も小地名としてあるものは鍛冶屋が常に住んでトンカチして居る谷の意義でない。朝鮮の田舎でよく見かける様に鍛冶屋は部落から部落へと農具の手入をして旅稼ぎをして歩く。ある部落の小澤の口にさゝやかな小屋掛けをして仕事をするさうした場所はいつても一定して居る。それは家からの距離や使ひ水を得る都合から定められたのである。かうして一年に一度か二度かきまつた場所に陣取るので其の小谷に冶谷の名がつく。陝川北慶冶爐面に冶爐里がある。昔鐵を製鍊したところである。

鑪又は釜 は日本と同じく訓はカマであるが竈谷には石灰爐があり炭釜洞スツカマは炭焼く谷である。

へ、鑛業及石類に關する地名

鑛業に因んだ地名は多いとは云へないが述者が朝鮮の鑛床を踏査した關係から割合に多くの事項を蒐集することが出来た。嘗て朝鮮鑛業會誌第一卷第二號に掲げた所を略述することにする。

金 音クム又はキム訓はシェーである。金と云ふ文字は好い字である。それ故金谷里キム金村里などはざらにあるが金のついた處必ずしも金に關係はない、金井は墓穴を掘る時境界をつける梓である

と云つた風で朝鮮は産金國であるから金のついた地名のある處には金が埋藏すると早合點してはならぬ。然し實際金溝全北や金坪里同や金昌咸南豊山咸南やは昔から砂金の産地であつた。

一方金谷シムギョと云ふ小地名のある谷には鐵鑛を採掘した跡のあるのが多い。蓋し金は鐵である。

水鐵、鐵 水鐵里と云ふのが時にある。水鐵はスチール又はムシェと云ひ鉄鐵のことであるが、水鐵里には褐鐵鑛を産するのが常である。水鐵は寧ろ褐鐵鑛を意味すると考へられる。鐵店と云ふのは鐵を吹いた處である。黃鐵里咸南がある。黃鐵は眞鍮のことであるが、黃鐵里と云ふのは黃鐵鑛を産するのであらう。又京城の北の碌磻峴には小さな黃鐵鑛が出て鮮人は山骨サシムルと稱して醫藥に用ふる。

銀 銀店、銀洞、發銀洞等の銀をつけた處には多く昔時の銀冶の跡がある。朝鮮では石金は昔掘られないで砂金が主に採られたが、銀の方は鑛脈や鑛塊をなす鑛床が古くから採掘された、其の或物は今では金銀鑛床と云へるものである。銀は實によく探究されてあつたと云へる。一方銀鑛床には方鉛鑛を伴ふのが常であるが又因亞鉛鑛に富んだものもある。例へば端川の檢徳のもの、如きである。

銅 銅店と云ふのは諸所に見受ける、銅冶であつて甲山咸南の銅店には含銅率が平均一割にも達したよき品位の銅鑛床があつて先年久原鑛業會社で採掘製鍊した。厚昌平北の銅店にも著しい接觸鑛床

がある。然し銅鑛の存在の疑はしい銅店もある、三陟郡江原や楊平郡畿京やの銅店では銅鑛を製鍊した確證を獲ないが、よく探究すれば其の跡や銅鑛床を見出さないとはいへぬ。

鉛 鉛店谷ヨシヨムコルとは鉛銅谷ヨシドクコルとか云ふ小地名がある。こんな谷にはきつと鉛や銀を採つた跡がある。鉛幕谷は江界北平にある。

黒石峴フクトヒシエトや土墨谷トモクコルと云ふのに黒鉛や無焰炭がある。土狀黒鉛は昔から朝鮮人は糸繰車の心棒に塗末して滑りをよくしたり、黒の染料にも用ひた様である。

一體朝鮮に限らず支那でもさうであるが、古く開けた土地柄で昔から用途のわかつて居た鑛物はよく探索された。地名に鑛産を示した様な鑛床はともかく其が採取されたことがあるもので、中には今でも有要なものがある。新しく用途がわかつた鑛物は勿論昔は採取されなかつたのではあるが其存在は知れて居た。金剛山原のタングステン鑛錳鐵にした所で昔から瘡おどりの薬に用ひたと云ふし、瑞興海の亞鉛鑛にしても昔から爐甘石と稱して役には立たないでも文書に掲げられて居る程である。支那に鑛物を探索するものに取つては文献を涉獵にすることと地名の解説から鑛床の良否を定めることが捷徑である様にも感ぜられる。

金の條下で言ひ残したが、古い砂金産地には種々の傳説が残つて居るもので、厚昌北平の山奥で開

いた話では鶏の腹中から金塊が出たので大きな倒れ木をどけて見た處其の下から枕程の塊金が露はれたとも云ふし、砂金に關する説話は甚だ多い。豊山南咸の高原地である達阿峙タウチは砂金産地であるがタラチはタラッキ又はタレキの方言で萩で造つた手提げ籠である。一日採取に従事すると籠に一杯砂金が採れたからそこを達阿峙と名づける様になつたのだと老人から聞いた。

砥石 トシ 谷には砥石になる硅長岩シリカイトが出るが、この石は又碎粉して水簾すれば陶土が得られる。實際砥石谷で陶土を取つて居る所が多い。朝鮮の陶器無論昔の高麗焼も硅長岩から其の原料を採つたのが多いのである。尤も朝鮮で現在最もよい高嶺土とされる河東南のものアヒンケイトは斜長岩の分解物だとされて居る。

灰 谷や窰谷には石灰岩があつて石灰に焼かれる。**硅石**チャトルコエ 硯には白色の石英脈がある。玉石谷には玉ゴキがある、海南玉と稱される蠟石の最も有名な産地は海南郡全南の玉埋山である。こゝからは薄蓋微色の明礬石も出る。水晶谷には水晶が出る。

餘 録

本篇を綴りながら考へられたことは、地名の考説には小地名が面白くもあるし重要でもあると述べたにも係らず、一渉り朝鮮地名の概説を試みやうとした爲めにかなり大きな地名を取扱つたこと

になり了つた遺憾さである。之と同時に研究の至らぬ爲めに述べやうとして言ひ残した事や、例に擧げた地名が適當でなかつたり、また外に多くの例があるのを見逃したりした。さう云へば地名につく言葉が無理に分類して甚だ叙述を窮屈なものとして面白い考説を入れ場所もないものとした。熊川^平北の清川江畔に安突^{アソト}と云ふ小地名がある、こゝで藤田組の手で一時間金鑛を掘つて居た。アンタは抱くことである、安突は清川江畔が崖になつて居て通行するには岩崖に抱き付いて行かねばならぬことから附けられたのである。こんな風な言葉から付けられた然かも其が種々の借り字で表はされた地名を解釋して行くのでなければ地名考説たるに足りない。朝鮮の地名に鳳、興、月、慶、禮虎、鶴、寧などの字のついたのが多いのも其の大部は宛字であらうと思へる、一々の地名を眞實に且つうまく説明して行くにはまだまだ前途が遠い。

それにしても本篇を通覽された方は朝鮮地名の構成の一斑はよく理解されたことと聊か自ら慰められる。前にも述べた様に述者に取つては十數年の負荷をとまかくこれで下ろした様な氣がする。殊に幾人かの知己からは本篇に對して激勵の語を寄せられたし、猶ほ述者の不文なるが爲めに不明な記述をした箇所について注意される親切を示された。本誌第四卷第六號四八〇頁の灘の條下に「支那に於ける如く海の沖合でなくて、河中の浅い處の意義」でと書いたのは句讀の打ち方の惡かつたので多數の讀者の誤解を招いた。述者の地理學の先生は東京から「支那に於ける如く」は「日本に於け

る如く」の誤りならんと申越されていつも變らぬ指導を給はつた、大阪の知己からは大江河と題する楊子江の灘の寫真が澤山這入つたをして説明の書かれてある英文の冊子を寄贈された。述者はかうまで師情と友情とを示されたことに對して自分の不文を歎かずに居られない。先の一句は次の如くに改める。「海の沖合でなくて支那に於ける如く河中の浅い處」とする。述者に取つては餘技であるこの朝鮮地名の考説を氣輕な氣分で述べ始めたものが八箇月の後に地學愛好家の溫情で嬉しく且つ嚴肅に筆を收めることは豫期だもしなかつた賜である。

